2020 年 8 月 2 日
聖霊降臨節第 10 主日

家庭礼拝のための

聖書・牧会祈祷・メッセージ

【 聖 書 】

ローマの信徒への手紙１６章２５節～２７節 （新約聖書 ２９８頁）

【牧会祈祷】

命の源である神様

私たちの持っているものは全てあなたから頂いたものです。命も、この命を生かす糧も、日々の生活を営むあらゆる力も与えられたものばかりです。これほど多くのものを頂きながら、私たちはなお足りないと嘆いてしまいます。神様、あなたがすでに必要を満たしてくだり、生きよと言ってくださっていると信じさせてください。

今日は平和を祈る日曜日です。私たちが今生きているこの国は、戦争によって国内外で多くの人の命を犠牲にしてきました。戦争に抗った教会もありましたが厳しい弾圧にあい、ほとんどの教会は戦争に協力しました。この歴史、信仰者たちの懺悔と心の痛みを私たちは引き継いでいます。私たちは自分の中にも平和を破ろうとする罪があることを知らなければなりません。争いを起こそうとする動きに敏感にならせてください。国と国との関係においてだけではなく、人と人との関係においても、争う以外の方法を選ばせてください。

新型コロナウイルスによって、世界は大きく変化しています。世界では 67 万人以上の人が亡くなり、たくさんの人が耐えがたい緊張感の中で生きています。経済はこれまでに類を見ないほど低迷し、仕事を失った人は国内だけでも 200 万人近くいます。神様どうか、人が生きる道を示してください。国や地域の指導者たちがこの時代を乗り越えるために最も良い方法を選ぶことができますように。労苦している医療者を助けていてください。療養や様々な事情のため教会に来ることができない友たちの日々をお守りください。この教会と幼稚園が、地域にあってあなたを証する光となれますように。新しい一週間、私たちが自分の誉れのためではなく、あなたに栄光を帰すような生き方ができますように、導いてください。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前を通して御前におささげいたします。アーメン。

【メッセージ】

パウロはイエス様の十字架と復活を「私の福音」と呼びました。私の福音とは、パウロが伝えた良き知らせであると同時に、パウロを生かし、ここまで駆り立ててきた良き知らせです。この福音は一部の宣教者に与えられている特権ではなく、私たちにも与えられているものです。

神様は私たちを救うために、愚かになってくださいました。神様は人を救うために人となり、十字架にかかるという方法を選ばれたのです。神は全知全能でありながら、ご自分を犠牲にしてくださる。それは神様

が私たちと同じところに立って、同じ事柄で労苦してくださったということです。

Sさんという忘れがたい患者さんがいます。ある日、ご自分の現状に耐えかね、スタッフや病院に怒りを向けて「市役所と警察に訴えてやる」と喚き始めました。私はSさんの話を聞いていたのですが、突然Sさんが怒りの矛先をこちらに向けてきて「さっきから『うんうん』って聞いてるけどほんとにそう思ってるの？」と言ったのです。私は怒りを収める方法のことばかり考えていて、全く共感などしていませんでした。Sさんはそれを見抜いていたのでしょう。正直に謝り、Sさんと一緒に市役所に電話をかけることにしました。市の担当職員さん相手にしどろもどろになるSさんに代わって説明をし、解決方法はないと言われました。残念な結果であるにも関わらず、Sさんはびっくりするほど穏やかになりました。どうしようもない現状を一番よく分かっていたのはSさん自身です。Sさんが求めていたのは、上っ面で慰める人ではなくて、一緒に這いずりまわって、自分の思いを共に味わってくれる人だったのでしょう。

イエス様は私たちと同じところに立って、生きる悲しさ、悔しさ、恥ずかしさ、どうしようもなさを知ってくださっています。そんな私たちを絡め取っている罪を背負って十字架にかかってくださいました。罪とは人や自分を傷つけることだけではありません。神様に対して的外れであることを罪と呼びます。神様の救いと祝福を受けようとせず、自分の弱さを知ろうとせず、自力でなんとかしようとすることもまた罪です。十字架でそのような私たちは終わりを迎えたのです。

十字架はイエス様の死であり、これまでの私たちの死です。ひとりで苦しみ、ひとりで涙する人生は終わりました。自力では命をやり直すことなどできない私たちなのに、イエス様によって私たちは一度死に、そしてイエス様によって救われた命を生きているのです。

パウロは最後にこう言います。「この知恵ある唯一の神に、イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくありますように、アーメン」。パウロは、私たちを通して栄光が神に帰せられると書きません。イエス・キリストを通してなのです。ローマの信徒への手紙でパウロはただ主を信じることによってのみ私たちは救われると言い続けてきました。人の努力による救いを思わせるような表現は徹底的に排除されています。

主イエスがこの地にこられてなお、私たちの人生は罪に苛まれますし、なお苦難があります。その中にあって神に栄光を帰すため必死に生きよ、とパウロは言いません。栄光を帰してくださるのは、私たちの人生に伴ってくださるイエス・キリストです。私たちが自分の人生を肯定できないときも、力弱り立ち上がれそうにない時にも、主はなお愛し続け、なお赦し続けておられます。その主こそが神を証し、神の栄光となってくださるのです。私たちの人生にはそのような主が伴ってくださいます。

神の愛は死を越えます。復活のイエス様がそれを教えてくれました。私たちが生きている間にできることは僅かです。その僅かなことすら中途半端かもしれません。しかし、主は命の終わりを越えて、愛を永遠のものとしてくだるのです。このお方以上に、委ねることができる人はいません。

パウロは伝えます。あなたが自分を栄光の姿へ変えるのではありません。主が変えてくださるのだ、と。主があなたと共にいて、主が栄光を帰してくださる。あなたはそのような人生を生きているのです。